小松原II遺跡

都市計画街路駅前吉原線
街路工事に伴う発掘調査

１９９６・１２

財団法人　和歌山県文化財センター

例　　言

1　本書は、都市計画街路駅前吉原線街路工事に伴う小松原II遺跡の発掘調査概報である。

2　都市計画街路駅前吉原線街路工事に伴い、埋蔵文化財の発掘調査を実施したのは、周知の遺跡である小松原II遺跡に隣接する地域である。調査の範囲は、平成７年度に和歌山県教育委員会文化財課が試掘調査を実施し、街路工事に係る道路拡張部分のうち延長190mについて（御坊土木事務所設置杭No.３～22区間）全面調査が必要であると判断した区間について実施した。

3　調査は、和歌山県（御坊土木事務所）から、当センターが委託を受け和歌山県教育委員会の指導のもとに実施した。発掘調査は、平成８（1996）年５月20日から７月26日、10月７日から10月25日にかけて実施し、調査面積は832㎡である。発掘調査と並行して整理作業を行い、本概報を作成した。調査の際に現地で使用した地区番号を報告書においてもそのまま使用している。

4　調査にあたっては、御坊市都市計画課、御坊市教育委員会、御坊市遺跡調査会の協力を得た。記して感謝する。

5　発掘調査並びに本書の作成は、当センター主査 渋谷高秀が担当した。

6　調査委員

巽　三郎（和歌山県文化財審議委員）

藤沢一夫（和歌山県文化財審議委員）

目　　次

1、小松原II遺跡とその周辺……1

2、調査……2

(1)基本層序

(2)調査区の概要

3、まとめ……10

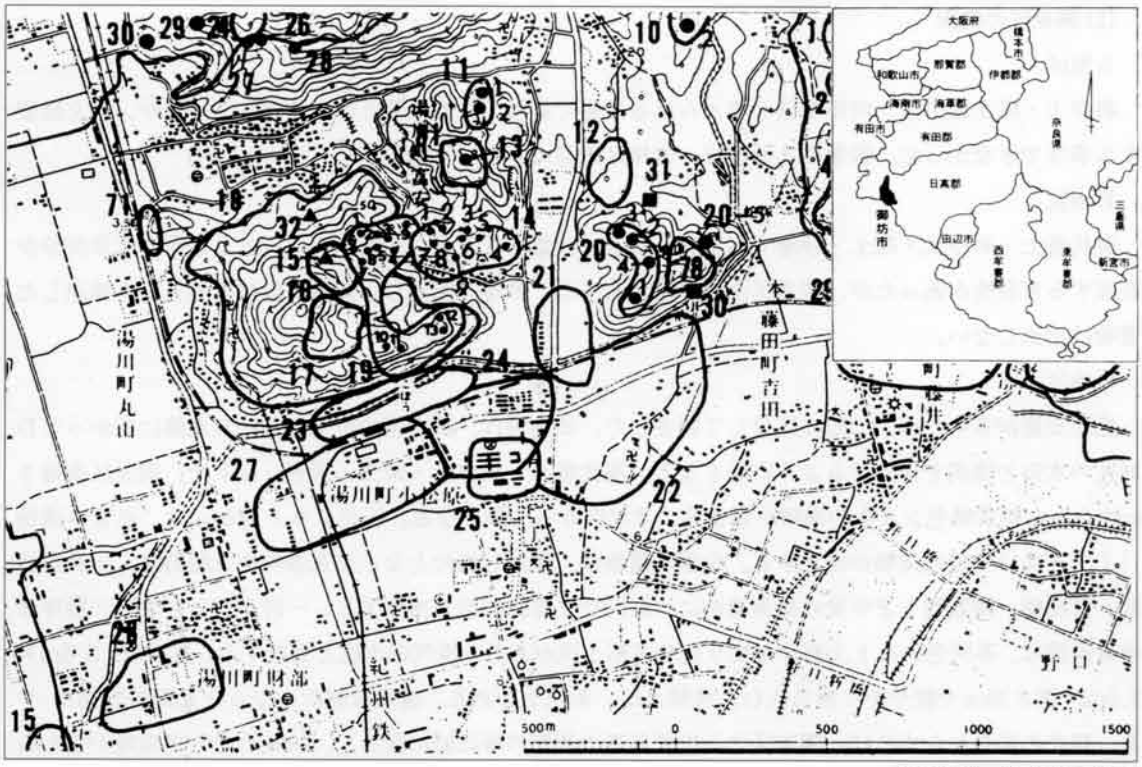
1、小松原II遺跡とその周辺

日高郡は、紀ノ川流域を中心とする紀北地方と会津川流域以南の紀南地方の中間地点に位置する。このため、日高地方は、古来より、畿内との交流が激しい紀北地方の影響、また東海地方との交流が活発な紀南地方の両方の文化が交差する地点と考えられる。

日高地方の中央部に位置する御坊市は、県内第二の大きさを持つ日高平野を眼前に望む地域で、豊かな木々を育む山地が北部や東部に存在し、また豊かな日高川の水流と黒潮暖流の影響を受け、自然環境に恵まれた地域である。

今回、調査が実施された小松原II遺跡は、水稲耕作が主流となる弥生時代からは日高郡における中心的な地域である。小松原II遺跡を中心として、蛭田坪遺跡、富安I遺跡、津井切遺跡など弥生時代から古墳時代にかけての遺跡群が存在し、また奈良時代の郡衙推定地としても知られている。中世に牟婁郡から有田郡にかけて活躍した湯川氏の平城である小松原館跡の存在も有名である。館跡周辺は、文献によれば、熊野詣での際の宿泊地として、平安時代からひらけており、また鎌倉時代後半には寺院跡の存在も確認されている。日高郡における最も立地の良い場所として、湯川氏もこの地に館跡を建てた。秀吉の紀州攻めを受け、湯川氏がその地位を失うまでは、館を中心としてその南に広がる小松原集落は、日高郡の中心地として栄えたのである。1585年、日高御坊ができ、中心はその地に移り寺内町として発展するが、この日高御坊成立以後の時期を、日高郡における中世から近世への転換と考えることが可能である。

第1図　調査区全景（北より）



第2図　周辺の環境

2、調　査

道路拡張により発掘調査の対象となった地域は、県道の両端部分、延長185m、幅３ｍ～９ｍの範囲である。調査区は、駅前に拡がる小松原Ⅱ遺跡や蛭田坪遺跡の南に位置し、湯川氏館跡が位置する県立御坊商工高等学校の南に拡がる小松原集落のほぼ西限を南北に切る形である。調査区の位置からは、微高地上に拡がる小松原集落の西端部にあたる事が推定できる。今回の調査目的は、湯川氏館跡の南に開けた小松原集落の成立が、文献に見るように平安時代まで遡るものかどうか、集落の盛期はどの時期か、湯川氏の館跡と関連する時期に城下町としてその機能を果たしていたのかどうかなどを解明するためのものである。今回の調査により、遺構・遺物が検出できれば、館跡だけでなく、それをささえる人々の生活空間・集落跡が確認できることになり、平安時代以降の御坊市における町の形成過程が判明することになる。

調査区はほぼ南北に伸びる路線で、現状は水田・駐車場・宅地である。調査の結果、中世包含層をＣＥ地区で確認し、中世の落ち込み遺構や溝などを検出した。遺物は少なく、中世から近世にかけての時期のものがコンテナで１箱出土したにすぎない。

(1)基本層序

各調査区共に耕作土・床土が存在する。ＢＣＨＬ各地区には、宅地や駐車場のための現代盛土があり、標高６ｍ代になっている。ＡＢＧＦＨの各地区は、標高5.5m代に地山である砂層が堆積する。河川堆積層と考えられる。この砂層は、ＥＣ地区で北側に向かって落ち込み、その上には中世の包含層であるシルト層が堆積する。中世包含層は、ＣＥＩＪＫ各地区に存在する。それ以外の地区には、包含層はない。地形的には、Ｃ地区の中央部から北側に向かって、急激に落ち込む。また、Ｄ地区の北端では、バラス層が検出でき、そのバラス層は、南に向かって急激に落ちている。旧河川の堆積層と想定できる。

(2)調査区の概要

Ａ地区

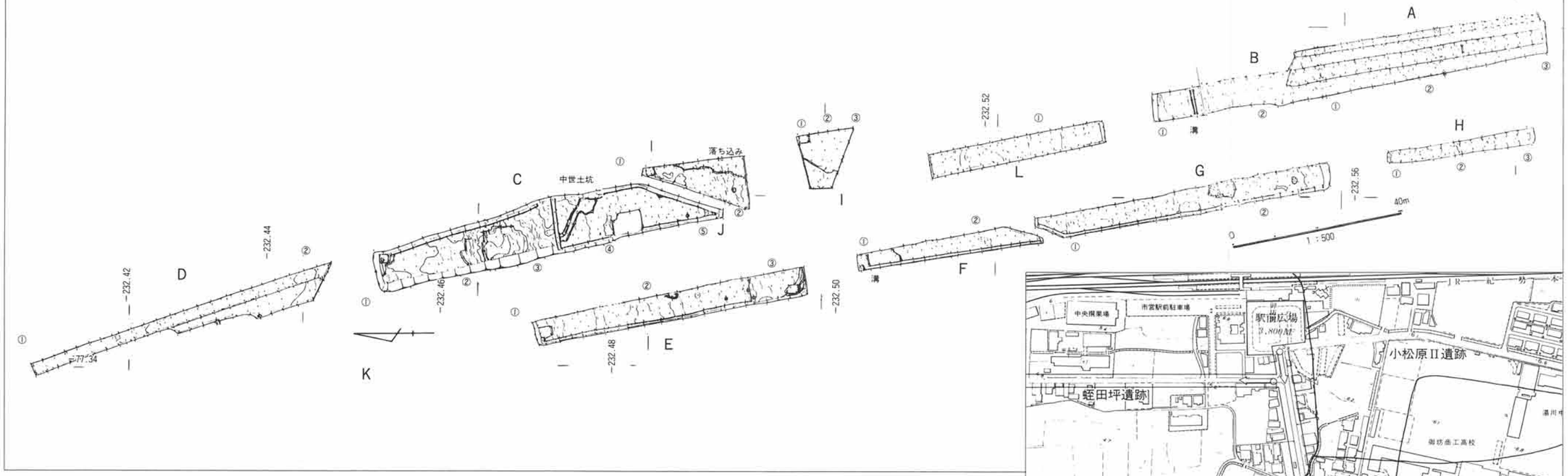
耕作土・床土以下は、河川堆積と考えられる砂層である。砂層は約２ｍ近く掘り下げたが、底を確認する事はできなかった。砂層の上面には、遺構は確認できず、遺物も出土しない。

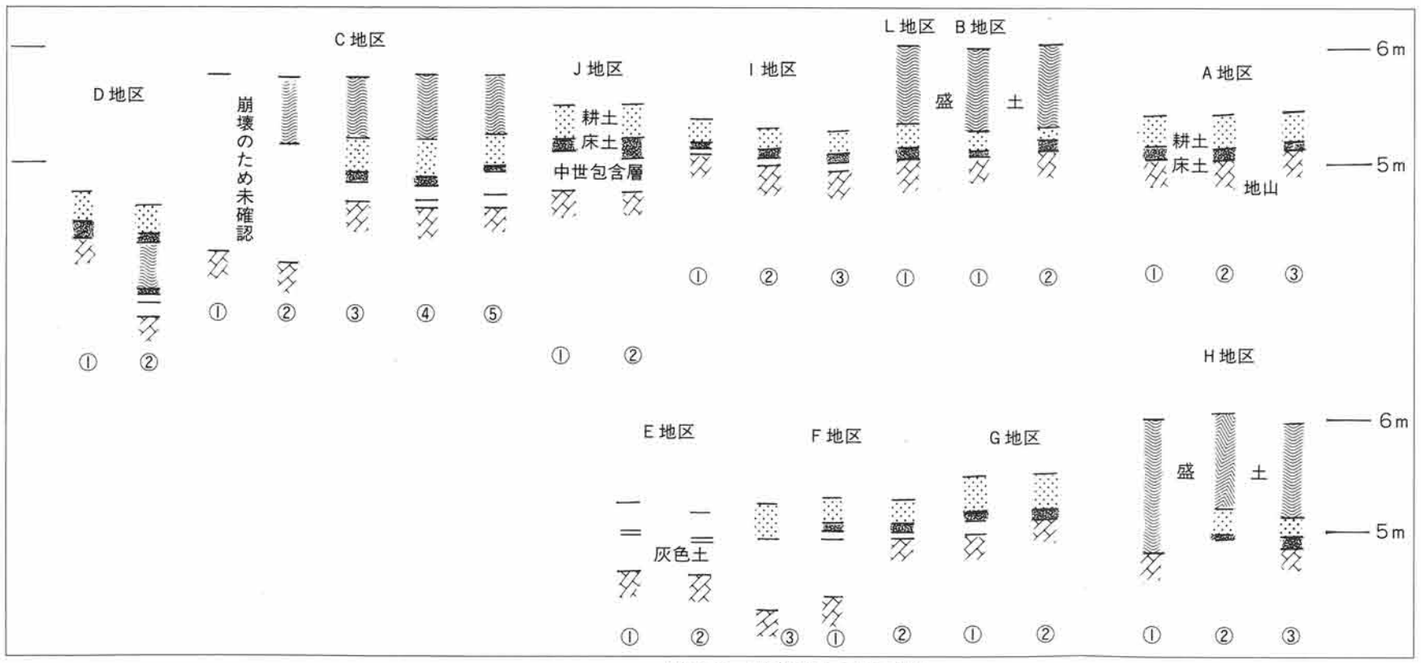
Ｂ地区

現代盛土・耕作土・床土・砂層である。Ａ地区で確認できた河川堆積と考えられる砂層の北岸部分が存在する可能性があったが、調査区全面砂層であった。砂層上面から、東西に伸びる浅い溝を検出した。遺物は出土しない。

Ｃ地区

盛土土量が多いため、二回に区分して調査した。旧地形は、調査区の中央部分から北側に向かってＤ地区の水田と標高を合わせるように低くなる。現代盛土・耕作土・床土・灰色シルトで、調査区南端３m地点から明黄褐色シルトの堆積が始まり、北に向かって厚くなる。灰色シルト層からは、近世の遺物（１）と共に中世の遺物が出土する。中世の遺物は、摩滅し細片となった瓦器椀や土師器皿、土師器羽釜、青磁椀、陶器類など中世の集落遺跡に一般的な日常雑器類が出土する。一段下がった北側の層序は、中世遺構は、茶灰色シルト上面から切り込む方形土坑があり、現代の土坑と重複する。規模は、3.5m×3.5m、深さ30cmで緩やかに落ち込む。堆積土は、茶色土である。遺物は細片となった瓦器椀が出土 する。調査の所見からすれば、調査区は小松原集落の西側の縁辺部に該当し、旧地形でも微高地が落ちる

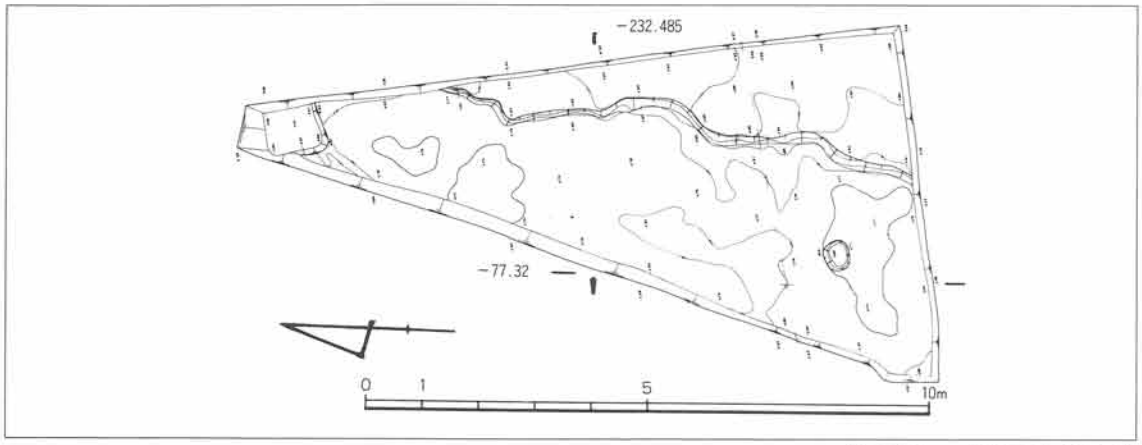




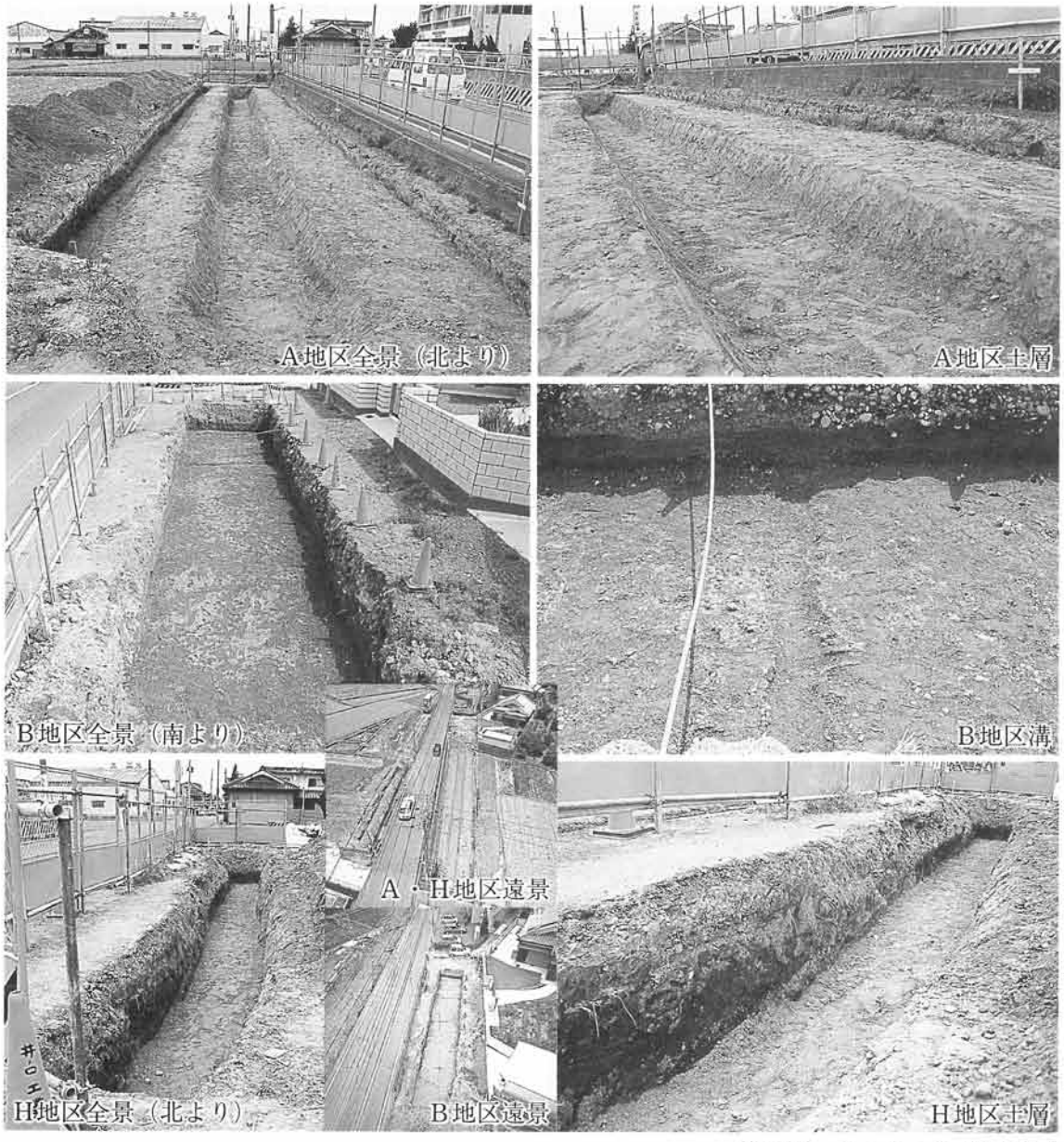
第3図　調査区土層模式図

第4図　調査区位置図

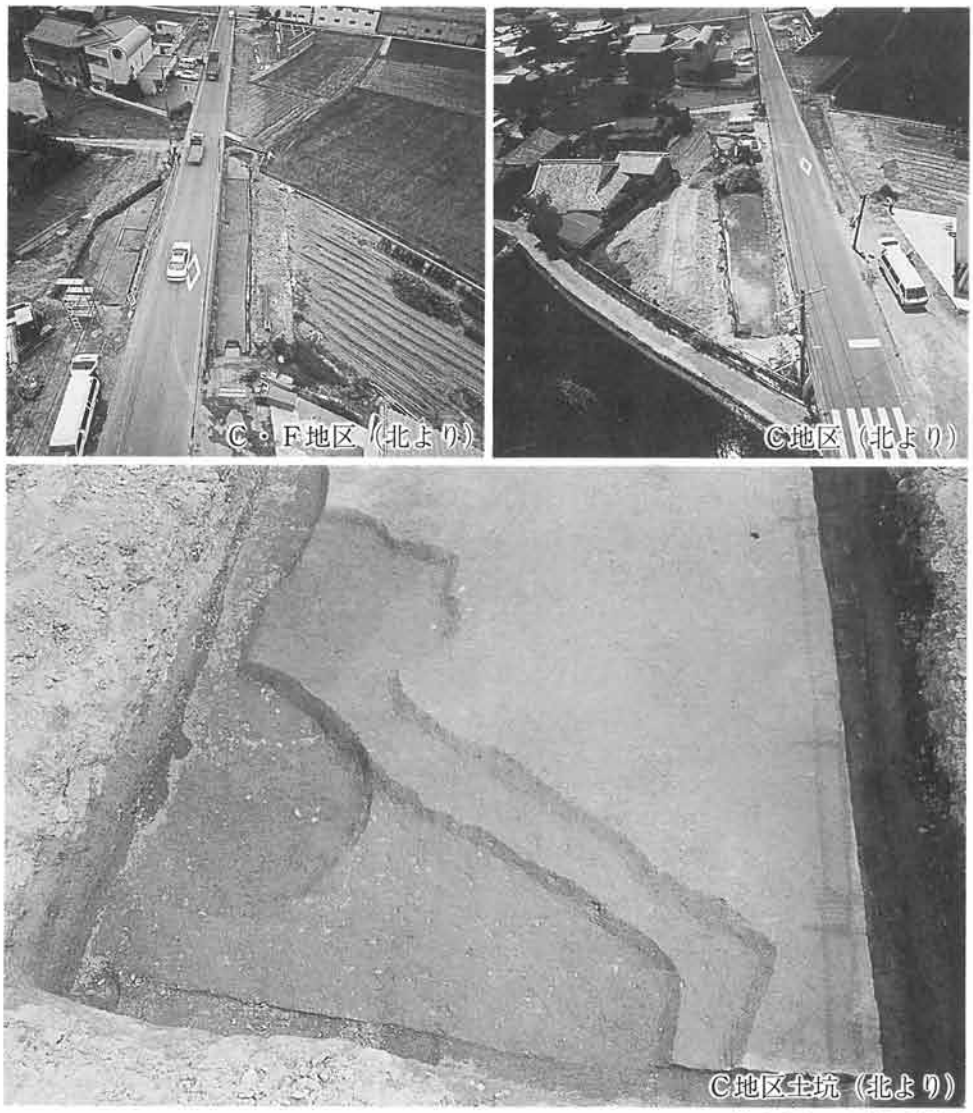
第5図　調査区全景（南より）



第６図　Ｊ地区自然地形



第７図　Ａ・Ｂ・Ｈ地区全景



第８図　Ｃ地区全景

部分になると考えられる。

Ｄ地区

最も北端に位置する調査区である。北側には、財部川が位置する。層序は、北端と南端では大きく相違する。北端は、耕作土･床土･砂礫層を含んだ地山である。地山は、トレンチ北端から４m地点で、落ち込む。南端では、耕作土・床土の下に、さらに近世から現代の遺物を含む旧耕作土・床土が堆積し、床土の下部にはマンガンが５㎝程度沈澱する。下位には、上面の凹凸が激しく中世から近世にかけての遺物を含むＨｕｅＮ 灰 ６／色粘土層・地山のＨｕｅ2.5Ｙオリーブ褐色シルト層が堆積する。遺構 は、地山上面からごく浅い凹状の落ち込みを検出したにすぎない。

Ｅ地区

耕作土・床土・灰色土（中世包含層）・茶灰色土・灰色シルト（砂多い）・砂礫層である。南側に位置するＥ地区とは堆積層の様相が違い、砂礫層の標高はかなり低くなり、その間にシルト層が堆積する。灰色土からは、摩滅した小破片の中世土器（土師器小皿３・４）が出土する。遺構は、南端で近世の溝

第９図　Ｄ・Ｌ地区全景

を検出した。溝から出土した遺物は豊富で、陶磁器（５～10・12～15・18）が主であるが、土師器皿（11）、18世紀の大阪産の炮烙（17）、土錘（20）、砥石（21･22）などもある。備前摺鉢（16）、壺（19）やまた13世紀中葉から後半にかけての常滑甕体部や16世紀代の瀬戸・美濃灰釉小皿なども出土する。

Ｆ・Ｇ地区

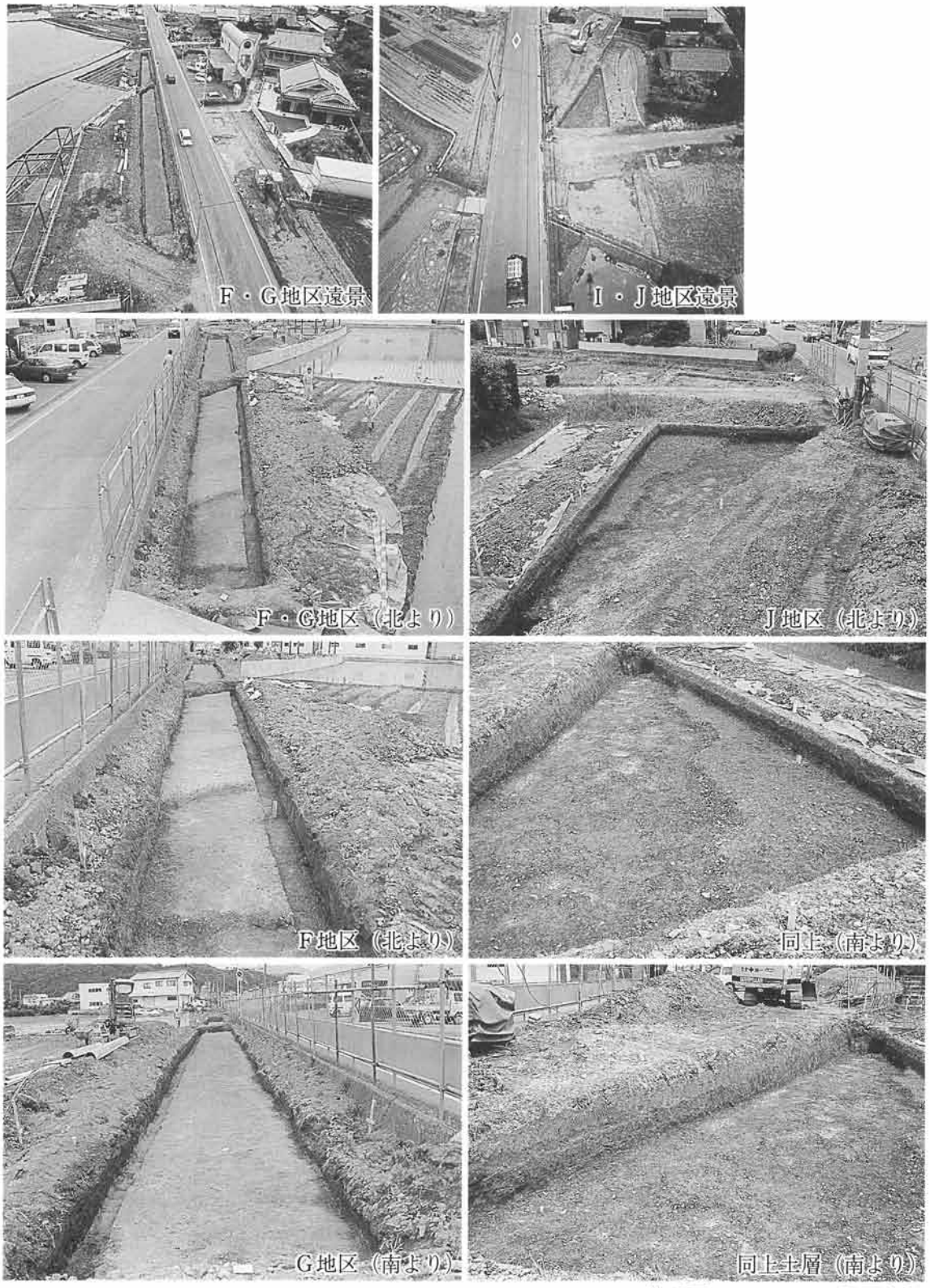
Ｇ地区は、Ａ・Ｈ地区と同じ層序で、地山は砂層である。この砂層上面からは、浅い凹状の遺構が検出できる。遺物は出土しない。Ｆ地区の層序は、Ｇ地区と同じである。Ｇ地区北端では、砂礫層が徐々に北側に向かって落ち込み、その上にシルト層の堆積を確認した。両地区共に遺物は極端に少なく、土師器の細片が４点出土したのみである。

Ｈ地区

河川堆積が確認できたＡ地区の西に位置し、砂層の堆積が想定できたため、全面調査はせず、トレンチ調査を実施した。層序は、現代盛土・旧耕作土・床土で、それ以下はＡ地区同様、砂層の堆積である。遺構・遺物なし。

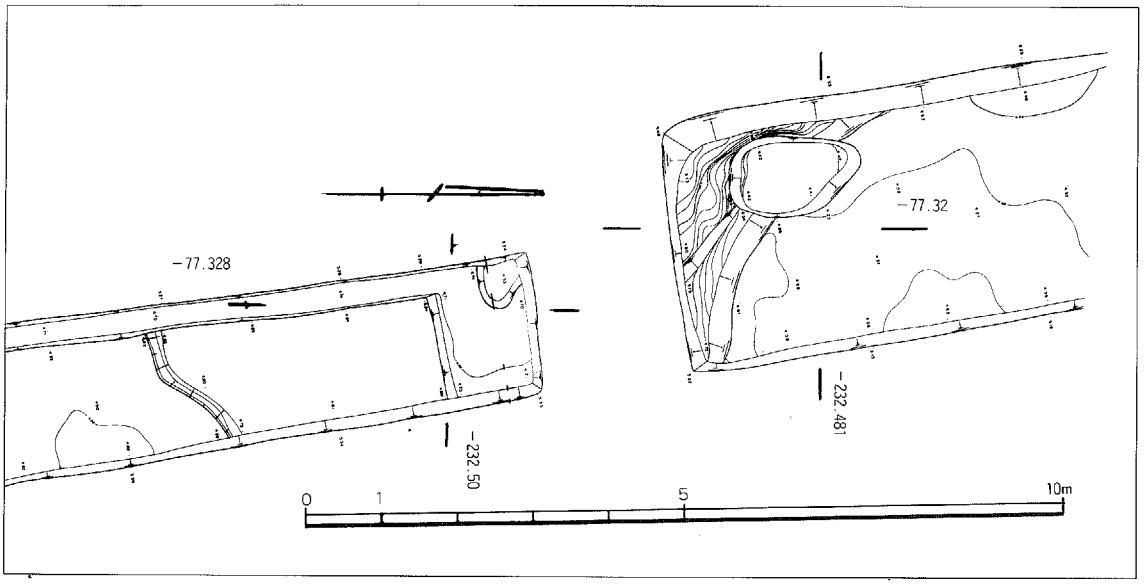
Ｉ・Ｊ地区

耕作土・床土で、バラス層が検出できる。この層は、東から西に向かって落ち込んでおり、調査区の東に拡がる小松原集落の微高地の西側部分に該当するものと考えられる。比高差は、30㎝前後である。

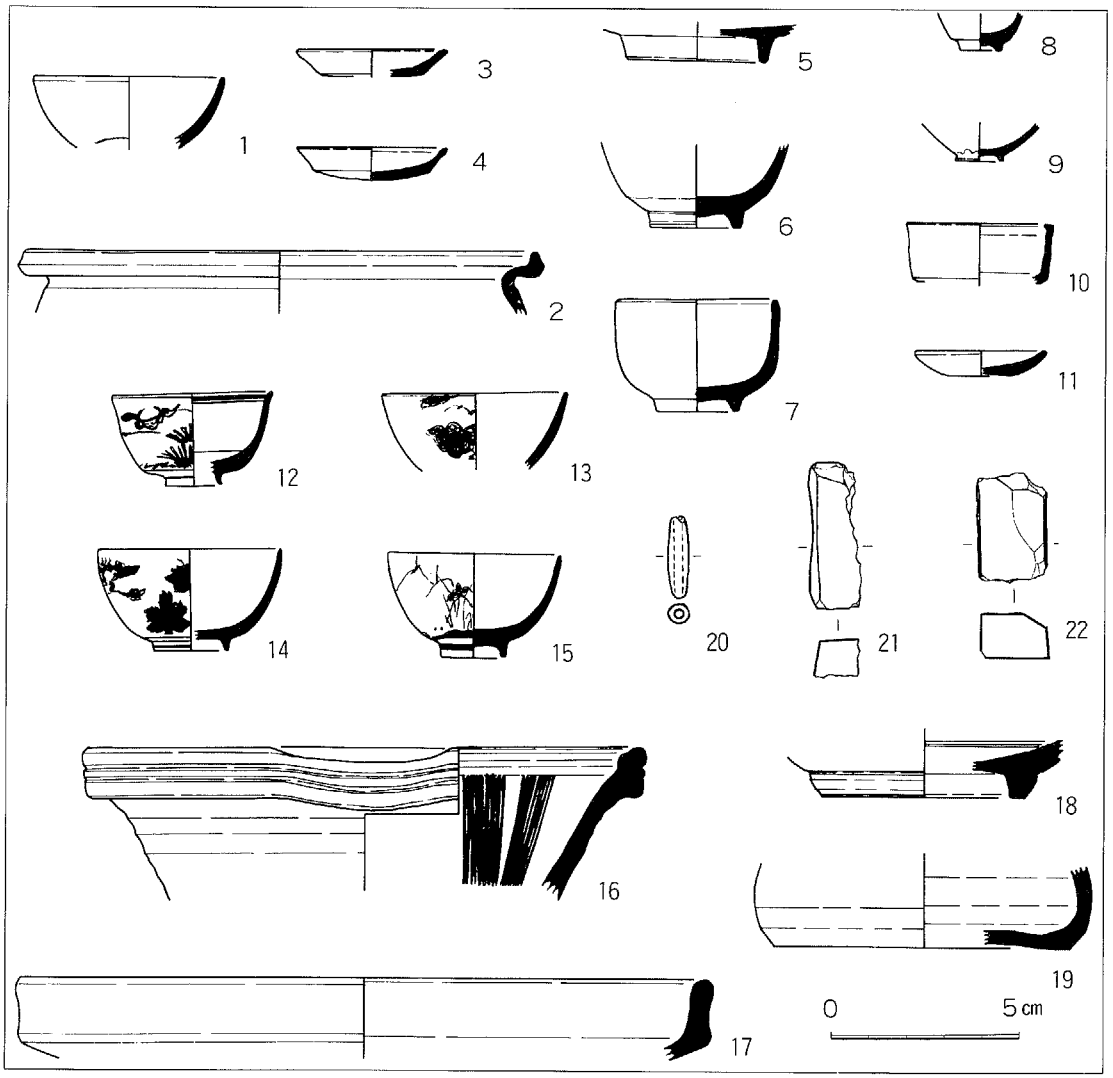


第10図　F・G・J地区全景

微高地に堆積した層から出土した遺物は、瓦器椀、土師器皿、土師器羽釜、青磁椀があり、時期は13世紀代である。土坑からは、ほぼ同時期の遺物が出土する。



第11図　E・F地区溝平面図



第12図　遺物実測図

K地区

砂礫を主体とする現代盛土が1.5m存在する。現代盛土層が砂層を主体にするため、土砂の崩壊が激しく、危険なため、調査を放棄した。

L地区

B地区の北側に位置するトレンチで、現状は駐車場である。10cm程度のコンクリート層の下に1m前後の盛土層があり、旧耕作土・床土が堆積する。地山はB地区同様、砂層を主体とする。遺物は、旧耕作より近世から現代にかけての遺物が出土したが、遺構は存在しない。

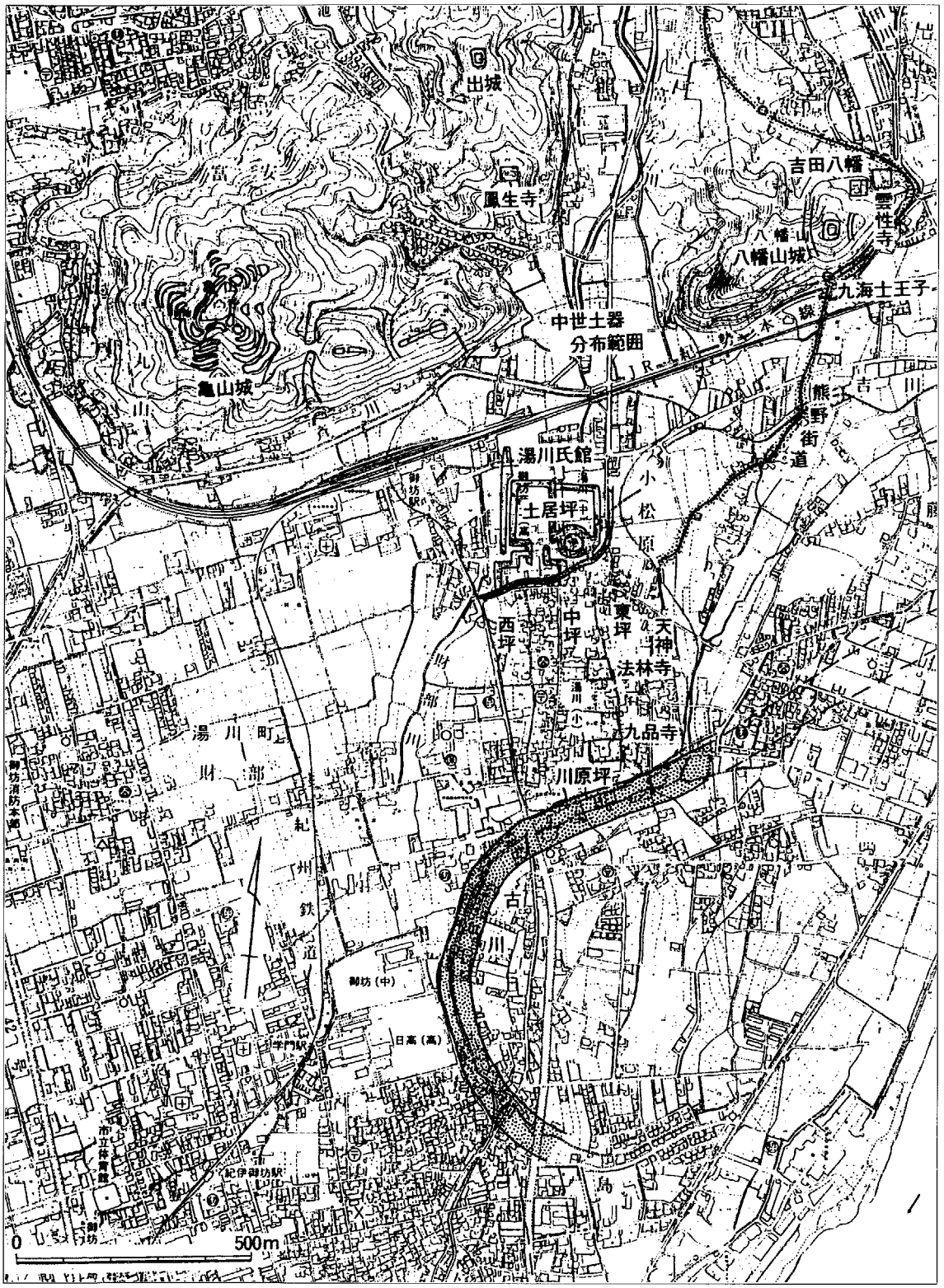
3、ま　と　め

－中世における湯川氏館跡と小松原集落－

弥生時代の集落跡或いは重複して存在する湯川氏館跡として著名な小松原II遺跡の調査であったが、成果は二点上げられる。一点は、弥生時代の集落跡は今回の調査地点までは及んでいないことを確認した事である。また古墳時代～奈良・平安時代の遺物も出土せず、財部川から以南の地域には、弥生時代～平安時代の遺構・遺物は確認できない。二点目は、中世～近世の時期の遺構・遺物の検出である。調査区は、現在の小松原集落の西端を南北に横切る形であるが、C・E地区で検出した中世包含層、或いはI・J地区で検出した微高地部分が西に向かって落ち込む地形を確認した。出土した遺物は、中世集落跡から出土する日常雑器類である。近辺に中世集落跡が存在する可能性が非常に高いが、その集落としては、東に広がる微高地上に展開する現在の小松原集落が考えられる。小松原集落の北側には、湯川氏館跡が存在する。それでは、平安時代から室町時代にかけての小松原集落と湯川氏館跡の関係は、どのようになっているのだろうか。湯川氏館跡あるいは小松原集落の字名・文献・考古資料の蓄積はあるのだろうか。

字名では、湯川氏館跡想定地は、土居坪と呼ばれ、その南は中坪、中坪の東は東坪、西は西坪とされている。中坪・東坪・西坪が小松原集落に該当する。さらに中坪の南は、川原坪とされ、昭和はじめの都市計画図によれば、この川原坪の南付近には、日高川から湾入して、古川と呼ばれる川が存在する。現在の天理教教会の南を流れる小川である。街道は、小松原の北東方向に九海士（くあま）王子が存在し、熊野街道が通過する地点にあたる。

湯川氏館跡の文献での成立は、天文18年（1549）であるが、遡る資料が数多く検出されており、13世紀中葉の初代湯川氏の時期に成立した小松原城の存在や三代光春が築城した亀山城の成立の時期、14世紀中葉を前後する頃には、既に何らかの館跡が構築されていた可能性がある。近時、湯川氏館跡の復元がなされた。それによると「北東に位置する富安から流れる小河川や南を走る小河川などを利用して館を築城したものと推定できる。館は、東西に長く方形に囲む外堀を持ち、中央部は南北方向に走る堀によって大きく二分される。東側と南側は、小河川が存在するため防御はしやすいが、西側は手薄なため、二重の堀が構築され、堀間には土塁が存在するという構造が推定できる。南西隅には入口があり、それは土塁によって防御される。二区分された内部には、堀と平行或いは直行する溝によって、きれいに区画され、内部には礎石建物が建ち並ぶ。」とされている。湯川氏館跡の考古資料は、鎌倉時代後半の仏教関係の遺物、14世紀前半段階に該当する巴文をもつ軒丸瓦や連珠文をもつ軒平瓦、道徳禅門・妙心禅尼などと線刻された瓦の存在は、寺院関係の礎石建物が存在していた可能性を示唆する。「常楽記」康暦二



第13図　湯川氏館跡、小松原集落周辺復元図（渋谷・川崎論文より抜すい）

年（1380）によれば、小松原に所在したとされ、現存する「九品（くほん）寺」の記事があり、この寺の可能性も考えられる。

小松原集落に関しては、文献では鎌倉時代～室町時代には、「小松原館御宿」との記載がみられ、古い時期には熊野御幸の宿として利用され、新しい時期には、宿場町になっていたと考えられる。

以上から考えられる事は、小松原集落は、平安時代末、熊野御幸に際しての日高川の渡河地或いは宿として成立し、鎌倉時代には、集落内には小松原御宿が作られていた。この小松原御宿は、最も立地のいい場所であれば、後代の湯川氏館跡と考えられる。また、鎌倉時代には寺の存在に見られるように、より集落は発展し、掘立柱建物とは違った恒久的な瓦葺きの礎石建物などが建つようになる。戦国時代になり、湯川氏館跡は、館としての機能よりも、戦闘に向いた平城としての性格を濃くする。「湯川氏館・小松原館」は、複雑な堀に囲まれた平城とも呼べる二郭構造をもち、現在の湯川神社付近に存在する。背後の日高平野を一望する丸山には、山全体に曲輪が配置された一大城郭である「亀山城」が配置される。さらに、館の南には「城下町」的な機能をもつ小松原集落が広がる。小松原集落は、寺を中心として、館跡から出土したふいごの羽口や鉄滓などの遺物からみるように、鉄砲や刀、或いは日常の鉄製品を作る鍛冶屋など生産集団の工房跡の存在なども考えられる。

この湯川氏館跡及び南に広がる小松原集落には、海路・街道を近くに持つ。熊野街道は、日高川で分断され、増水の際や渡河が不可能な時には、館の南に展開する小松原に宿をとったものと考えられる。城下町の南には、日高川から分流した、或いは旧日高川と考えられる川が存在するため、「港」の存在が想定できる。この港からは、日高川を通じて、紀伊水道にでるため、大坂・堺など、また伊勢湾地方などの遠隔地との貿易が行なわれたのである。

日高郡の中心的な場所、この「館」「山城」「城下町」「港」が集約される小松原は、御坊における最も栄えた都市空間であった。この湯川氏館跡を中心とした都市空間も、天正十三年（1585）秀吉軍による紀州攻めにより、湯川直春は館と亀山城に自ら火を放ち、熊野へ退却したとされる。文献では、湯川氏館跡は再建されたと言われるが、一時の勢いはなくなり、近世に本陣が置かれたように宿場町としては存続する。

一方、吉原御坊より文禄四年（1595）に現在の地に移された浄土真宗日高別院の周辺部は、小松原の衰退と前後して、寺内町「御坊」として発展した。日高地方の中心地域は、「小松原」の地より、日高別院を中心とした「御坊」へ転換したのである。この中心地の転換は、日高地方における近世の幕開けを告げる出来事であった。

今回の調査により、湯川氏館跡を中心にその南に広がる小松原集落が、中世にまで遡る事が明確になり、御坊市における中世都市空間の内容、近世への転換期など得られた成果は大きい。

渋谷高秀『小松原II遺跡発掘調査報告書』1996・3
渋谷高秀・川崎雅史『集落形成にみる中世から近世への転換』関西近世考古学研究第4集1996・11

報告書抄録

ふりがな	こまつばらにいせき
書名	小松原II遺跡
副書名	
編著者名	渋谷高秀
編集機関	(財)和歌山県文化財センター
所在地	〒640　和歌山県和歌山市広道20番地　　Tel　0734-33-3843
発行年月日	西暦　1996年　12月25日

フリガナ 所収遺跡	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
こまつばらいせき 小松原II遺跡	わかやまけんごぼうし 和歌山県御坊市 ゆかわちょうこまつばら 湯川町小松原	3020580	24	33度 54分 4秒	135度 9分 49秒	1996・5 ～ 1996・10	832m²	県道拡幅に伴う発掘調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
小松原II遺跡	集落跡	中世～近世	溝・土坑	中世土器 近世陶磁器	なし

小松原II遺跡発掘調査報告書

1996・12・25

編集発行　(財)和歌山県文化財センター

印　　刷　和歌山印刷所